Town Scape
タウンスケープ

川越市

時が人を結ぶまち川越

川越市長　森田 初恵氏

市長のメッセージ

川越市は、古くから埼玉県西部地域における中核都市として発展し、2022年に市制施行100周年を迎えました。

鉄道や幹線道路による交通アクセスにも優れていることから、市内では農業・工業・商業がそれぞれに発展しているほか、近年では多くの観光客が訪れる首都圏有数の観光地となっております。

全国的に少子高齢化や人口減少が進展するなど、社会の大きな変化に直面する中にあっても、活力のあるまちとして、将来にわたって持続的に発展できるよう、これからも各施策に取り組んでまいります。

はじめに

川越市は、埼玉県中央部よりやや南寄り、武蔵野台地の東北端に位置する。人口は約35万人で、県内市町村では3番目に多い。市内には複数の鉄道路線が通り、都心へのアクセスも良い。2003年に県内初の中核市に移行。2022年に市制施行100周年を迎えた。市は県西部地域の中心都市としてさらなる発展を続けている。

川越は、川越城を中心とする城下町としての繁栄が礎となる。市内より流れる新河岸川の舟運と街道によって江戸と結ばれ、人と物の盛んな交流により栄えた。江戸で焼イモが大ヒットした1700年代末には、たくさんのサツマイモが出荷された。「川越イモ」は良質で流通量も多く、「川越といえばサツマイモ」として、多くの人々に記憶されるきっかけとなった。川越の商家が立ち並んだ城下町の面影は、今も「蔵造りの町並み」として、姿をとどめている。県内有数の観光地として、サツマイモスイーツを手にした多くの観光客で連日にぎわっている。

グリーンツーリズム拠点施設に整備するキャンプスペースのイメージ(画像提供:川越市)

川越発のグリーンツーリズム拠点

市内東部に自然沼として県内一の広さを誇る伊佐沼がある。四季折々の自然が楽しめる伊佐沼は、市街地から離れた田園風景の中にあり、冬には、多くの野鳥が沼を訪れ、シャッターチャンスを待つ写真愛好家が集まる。ほとりの桜並木が見頃を迎える春には、多くの市民がお花見やバーベキューを楽しむ。

2022年、市は伊佐沼にある「農業ふれあいセンター」を「川越市グリーンツーリズム拠点施設」としてリニューアルオープンした。施設は現在、市民農園などの「農のある生活」を楽しむ場、農業関係者の研修の場などとして活躍中だ。この拠点を中心とした、「川越のグリーンツーリズム」の取り組みでは、四季折々の花や伊佐沼の自然に癒されながら、稲刈りや、サツマイモ掘りなどの農業体験ができ、拠点施設にあるバーベキュー場では、採れたての新鮮な農産物を味わうことができる。

さらに、市は来年度の利用開始を目指して、拠点施設にキャンプスペースを整備中である。スペースにはテントでの宿泊に加え、車での来場スペース、せせらぎ水路等を設け、2030年度までに年間約6千人の利用を見通す。農業の振興に加えて、観光の広域化や市での滞在時間の延長に繋げ、観光と農業を融合させた新たな地域資源として、魅力を発信していく方針だ。

川越の歴史と文化の礎となった農業に観光を取り入れて魅力を高めていく取り組みに期待したい。

川越市概要

人口(2025年11月1日現在)	352,729人
世帯数(同上)	171,495世帯
平均年齢(2025年1月1日現在)	47.6歳
面積	109.13㎢
製造業事業所数(経済構造実態調査)	571所
製造品出荷額等(同上)	8,781.5億円
卸・小売業事業所数(経済センサス)	2,081店
商品販売額(同上)	7,363.0億円
公共下水道普及率	87.2%
舗装率	75.6%

資料:「令和6年埼玉県統計年鑑」ほか

主な交通機関

- JR川越線　川越駅
  東武東上線　川越駅、川越市駅
  西武新宿線　本川越駅
- 関越自動車道　川越ICから市役所まで約5km

将来の産業の担い手を育む取り組み

川越市では新たな事業者の創出・育成に向けた動きが活発化している。2024年4月には、市が運営する、産業で新たな価値を創出するクリエイター支援施設「川越市文化創造インキュベーション施設(愛称:コエトコ)」が開設された。施設のインキュベーションオフィスには現在、11者のクリエイターが入居し、新たなビジネスの立ち上げに取り組んでいる。

また同年5月には、株式会社地域デザインラボさいたま(りそなグループ)が運営する、産業創出に向けた中心的な拠点を目指す「りそなコエドテラス」がオープンした。地域の価値向上と新産業の創出に向けて創業・育成支援機能の充実を図っている。

さらには同年7月、川越市のほか、川越商工会議所、株式会社地域デザインラボさいたま、日本環境マネジメント株式会社、株式会社日本政策金融公庫川越支店の5者が主体となり、創業支援等に関する事業連携協定を締結した。地域経済の活性化に向けて、各主体が保有する資源を有効に活用しながら、新たな産業を支える事業者の創出・育成に向けた取り組みをさらに活発なものとしている。

まちの持続的な発展には、新たな産業の担い手が不可欠である。創業に向けた機運の醸成と、様々な主体による育成支援を通じて、地域に根差した事業者の創出を促し、産業の将来を支える担い手として育む。これらの取り組みが、市の持続的な発展を力強く後押ししていくことが期待されている。

まちの次の10年を見据えて

市は現在、本年4月を開始時期とする「第五次川越市総合計画」を策定している。今後10年の目指すべきまちづくりの将来像を描き、その実現に向けて、目標や方向性を定めた基本構想を示す。市は少子高齢化・人口減少の進行など、社会の大きな変化の中でも、川越のまちの活力が失われていくことがないよう、10年後、さらにその先も、安心して幸せに暮らせる、そして魅力あふれるまちとして持続的に発展していくことを目指す。行政だけでなく、市民や事業者など、市にかかわるすべての人の知恵と力を結集して、まちづくりに取り組んでいきたいとしている。

市の一大イベント「川越まつり」(表紙写真)は昨年も盛況を極めた。2日間で約66万人の来場者を集め、まちは熱気と伝統の輝きに包まれた。祭りの見所「曳っかわせ」では、力強く囃子と歓声が響き合い、情熱がまちを包み込む。川越を愛する活力が、脈々と受け継がれている。　(齋藤康生)

川越市文化創造インキュベーション施設(愛称:コエトコ)(写真提供:川越市)